

資源添加率向上技術開発研究

(予算区分 県行政 研究期間 平成 20 年度 ~)
担当 : 水産技術研究所伊豆分場 長谷川雅俊

【研究の背景とねらい】

沿岸資源を持続的に利用するために、県内各地でマダイ等有用種の放流事業が行われています。放流事業の定着には、放流効果をさらに向上させる技術開発と普及が必要です。マダイ稚魚の放流適地は一般には水深が 10m 以浅で底質が砂場とされていますが、地先により環境条件が異なるため放流適地の条件は一概には言い切れません。本研究では、放流種苗の資源添加率を向上させるために放流場所として港内に着目し、港内への放流条件を明らかにするとともに、港内放流指針を作成し、放流技術の定着化を図ります。

【これまでに得られた成果】

(平成 26 年度の成果)

・下田市外浦漁港 (水深 3m、給餌あり)、伊東市伊東マリンタウン港 (水深 10m、給餌なし) 及び沼津市久料音響給餌箇所 (水深 4m、給餌あり) に放流されたマダイの行動、滞留状況を観察しました。

(1) 外浦漁港 : 8 月に放流されたマダイの観察尾数は 10 月初旬に減少しました。放流 3 日後から単独・急停止・追払い行動が観察されました。

(2) 伊東マリンタウン港 : 8 月に放流されたマダイ

の観察を 2 月まで行ったところ、季節が進むにつれマダイは成長する一方、観察尾数は少なくなりました。これは水温の低下とともに、港外に逸散した結果と考えられました。2 月でもわずかに港内に残っており、港によっては、長期間滞留することがわかりました。急停止・追払い行動が観察されたのは 10 月下旬以降でした。

(3) 久料音響給餌箇所 : 昨年からの設置場所が変更された音響給餌いかだの放流後 2 週間後の観察ではマダイは群で大量に滞留していました。

(4) これまでの研究の結果、港内は放流の適地と考えられました。そこで、港内放流を地域栽培漁業推進協議会で普及した結果、平成 26 年度の放流においては県内の 36 箇所の放流地のうち、9 箇所で港内放流が実施されました。

【期待される成果】

港の形状や規模、水深、給餌の有無によって放流したマダイの滞留状況は異なることが分かってきました。環境収容量に基づく、適正な放流尾数と管理手法を定めた港内放流指針を作成し、適地への放流を促すことでマダイ資源添加率の向上が図られます。

【今後の計画】

港内放流指針を作成し、遊漁による釣獲の影響が少ない場所での港内放流を推進します。

(作成 平成 27 年 4 月)



図 1 港内放流後 5 ヶ月間滞留したマダイ

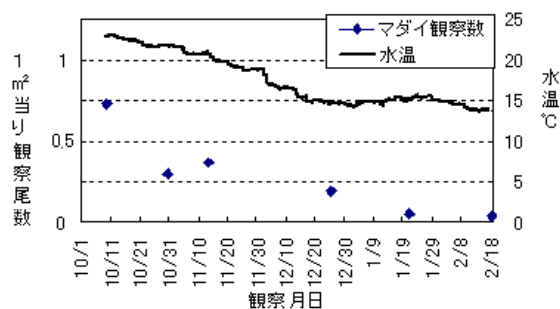


図 2 マダイ観察尾数と水温の推移